

英国領ボルネオへの松尾地区民の出稼ぎ

—松尾天満宮境内に寄進された大鳥居—

(1) はじめに



松尾天満宮は、『長宗我部地検帳』にもその所在が記載されている中世から存在していた土地に古くからある神社である。その正面入口に大鳥居が設置されている。この大鳥居は、当時英国領北ボルネオ島に水産工場(カツオ節納屋)が建てられ、そこで納屋番師やバラ抜き女工として出稼ぎに渡航した人々とその関係者によって昭和 6 年(1931)に寄進、建立された大鳥居である。

(2) 土佐清水市民の海外移住史

松尾住民が北ボルネオ島の水産工場へ出稼ぎに渡航するより前に、次の①②の海外移住の歴史があった。①「土佐清水市域からブラジルへの移住(明治時代末)」と②「台湾への漁業移民(大正時代末から昭和時代初め)」である。

①「土佐清水市域からブラジルへの移住(明治時代末)」

明治 41 年(1908) 4 月 28 日、農業契約移民 158 家族 782 人が笠戸丸にて神戸港からブラジル・サントス港へ入港したことに始まる(註 1)。その 2 年後(明治 43 年・1910)に第 2 回の移民があり、全国から集まった 247 家族 906 人が旅順丸にてブラジルに向かった。この中に三崎村斧積(現在の土佐清水市斧積)の人々 3 家族 7 人が含まれていた。彼らはサントス港から北へ約 350 k m に位置するグワタパラ耕地に向かった。ここで 2 年間コーヒー園の契約労働者として働き、その後、サンパウロ近郊で馬鈴薯・トマト・胡瓜・白菜・キャベツなどを栽培し、近郊農業をして生計を立てた(註 2)。

②「台湾への漁業移民(大正時代末から昭和時代初め)」

大正末期～昭和初めに高知・宮崎県等の漁業先進地からの移民を台北州知事が募集し、松尾や中浜からも移住した人々がいた。このような日本人の台湾移住は、実は大

正時代半ばから既に行われていた。高知県中土佐町出身の戸田圓次は、大正初期に大浜港(土佐清水市)を基地とし、カツオ漁業を営み成功。蓄えた資金で台湾(基隆市)に戸田鰹節製造工場を建設して事業展開した(註3)。大正末期～昭和初めにかけての高知県・宮崎県等からの台湾への漁業移民政策は、このような成功事例があり、追い風になったとみられる。

(3) 北ボルネオ島にボルネオ水産会社が建設した水産工場(カツオ節納屋)



ボルネオ渡航記念の松尾天満宮大鳥居・寄進碑

英領ボルネオ島渡航記念トシテ建設ス
ボルネオ水産公司東京本部タウオ出張所長 折田一二 現業監督 菊田信一

有田栄順太郎	中村女太郎	富田金五郎	山田徳次郎	中村政光	世話人
吉福為之助	中川傳太郎	下田庄松	次田徳治	富田市郎	竹田繁之
有田竹太郎	畑山光松	田中春吉	上原友次郎	下田六次郎	弘田幾松
富田福馬	中川柳太郎	下田拾吉	山田市松	福田光義	
畑山石松	池緑太郎	次田重松	下田寅吾		左官
竹田徳松	竹田鶴喜	有田頼致	荻田秀吉	大浜	次田辰五郎
竹田豊吉	有田常市	竹田繁太郎	下田善十郎	北川寿太郎	次田菊一
中村勘吉	田中庄市	榊原和義	岡崎一郎	山本竹市	昭和六年六月吉日

松尾天満宮のコンクリート製大鳥居。「ボルネオ渡航者献鳥居 昭和六年建立」との銘。当時英国領北ボルネオ島に「ボルネオ水産公司」が建てた水産工場(カツオ節納屋)で納屋番師やバラ抜き女工を高知県等から募集した。その募集に松尾や大浜の住民が応募し、数十名が渡航。北ボルネオ島に到着した。渡航の無事と仕事の安全を祈念し、渡航者とその関係者がこの鳥居を建立したと思われる。

日本人が初めてボルネオに漁業進出したのは、大正7年(1918)である。昭和2年(1927)、ボルネオ水産公司(本社・東京、昭和8年会社名を「ボルネオ水産株式会社」に改称)がタウオを基地とし、カツオ一本釣りとかつオ節製造を開始した。当時の『土州の水産(昭和2年1月号)』には、従業員の募集要項と、会社の概要が掲載されている。これによると、カツオ釣り漁夫は、カツオ釣りの経験者を18名募集し、月給が50~70円、賞与は漁獲物一貫目につき4銭、旅費(ボルネオへの往復の渡航費)と医療費は雇用主持ち、食費は現品支給という具合だった。50~70円は現在に換算すると10~14万円といったところか。納屋番師や骨抜き女工などの職工も同時に

募集し、月給 70 円前後であった。このときの募集により、清水町松尾から 8 名、須崎町から 9 名、宇佐町から 6 名、白田川村及び伊豆田村から各 1 名の計 25 名が就業することになり、北ボルネオ島に渡航することになった(註 4)。

操業用のカツオ船は、静岡県焼津において建造された。カツオ船は、40 馬力・28～30 人乗りが多く、乗員は布・下ノ加江・以布利・窪津・津呂・伊佐・松尾・大浜・中ノ浜・清水等の現土佐清水市出身の人々が多かった。納屋番師・骨抜き女工等の職人は、鼻前七浦（伊佐～養老までの浦々）出身の人々たちであった(註 5)。

この会社のボルネオにおける事業は、高知県民が重要な役割を果たし、中でも現在の土佐清水市域出身者はその核となる人材であった(註 6)。近世以来のカツオ漁・カツオ節加工の伝統から、これらの仕事に精通していた鼻前七浦の人々。そのことが会社の核となった土佐清水市域の人々の背景にあった。

註

註 1 斧積郷土誌研究会『斧積郷土誌』土佐清水市斧積、1995 年。

註 2 註 1 に同じ。

註 3 岡林正一郎「八 英領ボルネオへの進出、第二編 近代より現代」(『土佐のカツオ漁業史』中土佐町、2001 年、360—363 頁。)

註 4 註 3 に同じ。

註 5 註 3 に同じ。

註 6 註 3 に同じ。

—土佐清水市中央公民館で土佐清水市郷土史同好会定例会講話を開催—

「外科医・伝説の俳人 細木大三郎」

土佐清水市郷土史同好会会員 西村光一郎氏

資料が少なく新『市史』に取り上げることができなかった伝説の俳人・細木大三郎について西村光一郎氏の講話が 7 月 17 日(土)午前 9 時 30 分より約 1 時間にわたり、土佐清水市中央公民館 3 階多目的ホールで行われた。会員ほか 33 名の方々の出席者があり、皆さん方は熱心に講話を拝聴していた。これまでベールに包まれていた細木大三郎の実像が、その句とともに鮮やかに甦った。ホトトギス巻頭を飾る句をつくった伝説の俳人。本職は内科医で、講話聴いていた女性会員の一人は、小 4 のとき加久見川で授業中水泳しているときに牡蠣柄で足を切り、細木先生に 7 針縫合してもらった思い出話も披露された。戦争中は軍医大尉として戦場にも赴いた。西村氏も若いころに盲腸の手術をしてもらったという。この夏、「NHK テレビ放送」にてこの細木大三郎の特集ドキュメントが放送されるとのこと。放送は 8 月初旬か？今からその放送が楽しみである。



音もなき銀河と遠き漁火を